

中世考古へやきものガイドブック

中世やきもの世界

## はじめに

みなさんが中世のやきものをみる機会があったら、それは美術館や博物館に行ったときではないでしょうか。これから紹介するやきものは、どちらかといえば美術館ではなく、博物館に展示されているやきものです。

それらは大半が遺跡から出土した「遺物」とよばれるもので、接着剤でつないだり欠けた部分を石膏で埋めた、つぎはぎだらけのものが多くははずです。なぜ、そのようなやきものを展示するかといえば、大半が当時の食生活を中心とする日常生活のさまざまな場面を実際に支えた道具だからです。博物館では、そのやきものをとおして中世社会の「生の実態」を伝えようとしているのです。

考古学研究者は、遺跡からやきものが出土すると、「なぜこの遺跡から出

土したのだろうか」「これはどのようなに使われたのだろうか」そして「誰が使ったのだろうか」ということ、つまり当時の社会の実態を追究します。

私自身、さまざまな種類のやきものを理解することはとてもたいへんなことで、その上、やきものをとおして中世社会の一端をあきらかにするなどとはとても言えませんが、その手がかりを得ることはできるでしょう。

本書では、博物館の展示の前に立った観覧者の立場に立って、中世のやきものの素朴な疑問に答えるような情報を提供したいと考えています。

序章 中世考古学とやきもの…………… 7

第1章 中世やきもの世界…………… 13

1 やきものといえば椀と皿 14

2 中世やきものを代表するすり鉢 18

3 煮炊きのためのさまざまな鍋 21

4 容器・コンテナとしての壺・甕 25

5 酒とやきものの深い関係 34

6 人びとの祈りとやきもの 40

7 明かりや暖房のためのやきもの 42

8 茶の湯の発達とやきもの 47

第2章 中世やきものづくり…………… 51

1 中世やきものの分類 52

2 さまざまな窯 57

3 中世やきものの生産地 64

4 文様を知る 78

5 原型と模倣 83

6 誰がつくったのか 87

第3章 列島に広がるやきもの…………… 93

1 列島に広がるやきもの 94

2 津々浦々のやきもの 107

3 馬の背に揺られるやきもの 119

4 物資をどん欲に飲み込む鎌倉 125

中世社会とやきもの

.....

— 1 — やきものと儀礼

— 2 — 食文化とやきもの

— 3 — 中世やきもの特質

130 132 135

発掘された中世やきものがみられる博物館など

142

引用参考文献 148

おわりに 152

序  
章

中世考古学とやきもの

## 遺跡とやきもの

中世の遺跡で出土する遺物の九割以上が「やきもの」といわれています(図1)。たとえば鎌倉時代の首都であった神奈川県の鎌倉遺跡群の発掘調査では、金属製品や木製品もたくさん出土していますが、やはりもっとも多い遺物はやきものです。

なぜ遺跡からやきものがたくさん出土するのでしょうか。それはやきもの以外の漆椀や桶などの木製品は不用品になれば燃料として使われ、鉄鍋などの金属製品はリサイクルにまわすことができるからです。また木製品は土のなかで腐り、鉄製品は錆びてしまいます。それにたいして、割れてしまったやきもの大半は使い道がなくなつて捨てられるのですが、腐ることがないので地中に残りつづけます。

しかし、絵巻などの絵画資料をみても明らかなのですが、出土した遺物が当時の生活の実態をあらわしているとは思えません。中世にさかのぼらなくても、博物館の民俗展示コーナーにならぶ二〇世紀の民具をみてください。家のなかの生活用具、納屋の農具などの大半が木製です。やきものは食卓や厨房の食器類、仏壇の燭台しよくたたいくらいでしょうか。むしろやきものは生活用具の中心とはいえません。そのような状況は、中世でもあまり変わらなかつたのではないのでしょうか。

それでも、出土したやきものを調べることは中世考古学にとって非常に大切なことです。それはやきものが食にかかわる道具だからです。

食事をするときの器である椀や皿、食材を調理するためのすり鉢、ものを貯蔵するための壺・甕つぼなどが代表的な食にかかわるやきものといえますが、これらは地域や階層に関係なく誰もが使うもので、各地の遺跡から出土します。ただし、地域や階層が異なると、出土するやきものの種類や量に大きなちがひがあることがわかつてきて、それが中世社会のあり方を知る手がかりになります。

## 考古学とやきもの

やきものに精通した研究者は、わずかな破片をみただけで「いつ、どこで」つくられたものかをいいあてることがができます。それは、やきもの固有の情報を的確に把握できているからです。やきもの固有の情報とはなんのでしょうか。それはじつにさまざまな種類と器種のやきものの形や色合い、硬さ、重さなどの感覚的な情報が考古学的に整理されたものです(図2)。

窯跡の研究によって生産されたやきものの器種を把握できます。さらに生産技術や生産体制などもわかっています。そして、集落・都市・墓地といったさまざまな性格の遺跡での用途や使用年代などの情報とクロスチェッ



根来寺坊院跡(和歌山県岩出市) 検出の埋甕



博多遺跡群(福岡県福岡市)のゴミ穴

発掘調査で検出されるやきものには、大きくふたつのパターンがあります。ひとつは根来寺坊院跡の埋甕のように、使用時の状態で検出されるばあいです。ふたつめは博多遺跡群のゴミ穴の例のように、不用品になって廃棄されたものが確認されるばあいです。前者の例はやきものの使われ方がわかるのにたいして、後者は出土時にはその使われ方はわかりません。

図1 やきものの出土状況

クをくりかえし、その蓄積がやきものの破片から「どこで、いつつくられた」というような情報となるのです。

博物館の展示で、ほんのわずかな破片から完形品が復元され、「名称、時代、用途」などの細かな解説をつけることができるのは、このような研究成果があるからなのです。

「やきものを分類する」「やきものを数値化する」作業は、やきもの研究の基礎作業として重要なことなのですが、いずれもやきものに関する幅広い知識が要求され、くわえて膨大な資料を前にして臆することのない行動力が必要となります。

### 対象となる時期区分

中世のやきものの生産と流通の変化は、日本列島全域で横ならびになるものではありません。しかし、そのおおよその動向から、中世の前期と後期の二つに大別して話を進めたいと思います。

中世前期とは、一二世紀中葉～一四世紀中葉で、平安時代の末期から南北朝時代のことです。

中世後期とは、一四世紀末～一六世紀後半、室町時代から戦国時代のことです。

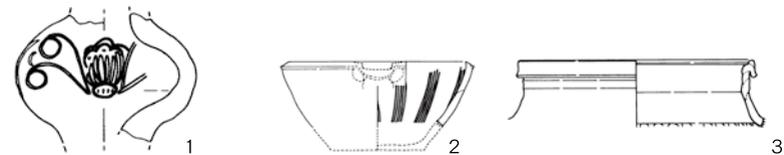
ここで中世前期のはじまりとした一二世紀中葉は、列島各地の窯業

地（やきものの生産地）で「壺・甕・すり鉢」を中心とする生産がはじまるとともに、それらのやきものが商品として広域に流通するシステムが確立する時期です。しかし、一一世紀中葉にはすでに食膳具の椀や皿に変化がみられ、この時期を中世的やきものの成立と考える研究者もいます。

中世前期と後期の境とした一四世紀中葉から後半は、列島各地に点在した中世窯業地の大半が淘汰される時期で、引きつづき生産を継続する窯業地は、瀬戸窯、常滑窯、越前窯、信楽窯、丹波窯、備前窯の「六古窯」とよばれる主要な生産地にほぼ限定されるようになります（図3）。また、同じころ、瓦器や土師器などの土器にも器種に変化があらわれます。

そして、戦国時代のはじめ、一五世紀後半になると六古窯にはば集約された窯業地も、それぞれ合理的な生産体制と特定器種の増産を推し進めるようになり、それは近世的陶器生産のはじまりともとらえられています。

おおまかな時期設定ですが、それはこれから述べるやきものの分類や生産などの動向のなかで説明を加えてゆきたいと思います。



1 は、灰釉がほどこされ、体部には印花文が配されていることから瀬戸窯の古瀬戸製品と判断できます。  
2 は、すり目をもっていること、口のつくりから、備前焼のすり鉢です。  
3 の甕は、幅のある口縁帯をもつことから常滑焼の甕と判断できます。

図2 鎌倉遺跡群で出土したやきものの破片



図3 六古窯の分布